# 呼称に見られる「建前」と「本音」
## —映画のビジネス場面における呼び名を分析して—

北山 環

### 1. 序

日本における社会行動形式を論じる時、必ず取り上げる典型的な概念の一つは、「建前」と「本音」の二重構造である。「建前」と「本音」は、'the meaning of the surface sentence uttered' と 'the real meaning which the speaker intends' (Okabe, 1987: 135)、'overt principle' と 'real intent' (Dale, 1995: 105)、'(a person's) submission to moral obligation' と 'what (he or she) really wants to do' (括弧内は筆者) (Miyanaga, 1991: 89) 等、'話者の心情' から '表出された文意' までを範疇として様々に訳されているが、基本的には、「ある文化社会で遵守されるべき言動規範」と「各個人の持つ真の意向」の対極であると捉える事が出来る。そして、この、社会と個人の意図するところの食い違いは、決して日本に限ったことではなく、どの文化圏にも存在する現象なのである。つまり、「建前」と「本音」は、日本固有の概念ではなく西洋にもある (北山, 2007: 82n56) と言える。ただ、文化によって、その表れ方や程度が違う (ibid.) のである。

> Every culture has its own polite fictions. Whenever we want to be polite, we must act out certain fictions, regardless of the fact. ... One of the most fundamental of American polite fictions is that "you and I are equals." The corresponding Japanese polite fiction, however, is that "you are my superior." (Sakamoto & Naotsuka, 1998: 3-5)

ここでの 'polite fictions' は「建前」と解釈できるし、井出 (2006)[1)] の提唱する「わきまえ」('discernment', 'sense of place' (Ide, 1992)) も「社会的に期待されている基準」('social convention' (Ide, 1989)) に従うことであるとされ (Ide, 1992: 115)、その基準が拘束力の少ない範囲で見られる欧米の事例が紹介されている。

本稿は、日本文化と英米文化における「建前」の違いが呼称の使用にどのように反映されているのかをそれぞれの映画のビジネス場面で考察し、呼び方に軋轢が起こった状況を分析することにより、話者の「本音」の根拠となる要因を探ろうとするものである。第2

章は呼称の定義と検証方法、第3章は映画での呼称使用の実態、第4章は文化背景と呼称、第5章は「本音」の根拠、第6章は結語である。

## 2．呼称の定義と検証方法

### 2.1　呼称の定義

近年の呼称の先行研究の多くは、Brown & Gilman（1960）を先駆けとして、'address pronouns'、特に、T/V（tu/vous）の区別を巡って行われてきた。その中にあって、Dickey（1997: 255）が指摘するように、'nominal address forms'（呼称名詞）の使い方に関する研究[2]も進んできている。本稿は、英語と日本語の呼称を比較分析するにあたり、両言語の 'nominal address forms'、それも、文脈の中で聞き手や第三者に言及した用例ではなく、文脈から独立して[3]相手の注意を喚起する「呼びかけ」（小林, 2004: 115）を扱うことにする。Leech（1999）の以下の定義によると、'vocatives' ということになる。

> ... a term of address is a device used to refer to the addressee(s) of an utterance.... A vocative, on the other hand, is a particular kind of address term: a nominal constituent loosely integrated with the rest of the utterance. (ibid.: 107)[4]

呼称名詞の区分は、研究者によってその範囲や名称が異なる[5]が、ここでは、Leech（1999: 110）の分類[6]を用いることにする。

A. Endearments　e.g. darling, dear, sweetie
B. Family terms　e.g. mum, dad
C. Familiarizers　e.g. guys, folks, bud, man, buddy（AmE), mate（BrE）
D. Familiarized first names　e.g. Jackie
E. First names in full　e.g. Paul, Thomas
F. Title and surname　e.g. Mr. Graham
G. Honorifics　e.g. sir[7], madam
H. Others　e.g. you, Uncle Joe

### 2.2　検証方法

物流や市場のグローバリゼーションが加速する1980年代以降のビジネス界をテーマとする日本映画（16本）、アメリカ映画（6本）、イギリス映画（5本）に現れる呼称を筆者の聞き取りによって抽出した。大都市、東京、ニューヨーク、ロンドンを中心に大企業の中で働く人々が企業内で上役、同僚、部下をどのように呼び合っているのかを考察し、各文化圏において、「建前」として使用される呼び名を確認し、その中で「本音」が現れる状況を検証する。

## 3．映画での呼称使用の実態

日本と英米の文化比較で登場する代表的な項目は、「集団主義（Collectivism）」対「個人主義（Individualism）」、「垂直型社会構造（Vertical Structure）」対「水平型社会構造（Horizontal Structure）」、「ウチ・ソト意識（In-group/Out-group）」の有無である[8)]。日本のように集団主義でウチ・ソトの意識が強い垂直型文化社会では、個人は親しくなるまで自分の本当の気持ちを明かさないとされる。他方、欧米の個人主義で水平型の社会組織では、個人は親疎の度合に拘らず、自己表現を行うと指摘されている[9)]。つまり、言語活動の中でも呼称が、話の当事者間の関係を端的に表わし、それ故に文化の差異をより敏感に表現する[10)]ならば、日本では上下関係に適する間接的な呼びかけが、英米では、仲間意識を助長する個人向けの呼びかけが使用されていることになる。実際、アメリカでは、知り合って早い時期から互いに親しい友人として対等に振舞い（Sakamoto & Naotsuka, 1998: 10）、ファーストネームで呼び合う[11)]。イギリスではアメリカほど早くはないが、ファーストネームを使うことが一般的（ibid.: 11-15）である。日本では、年齢や地位の上下が呼称の選択を決定する[12)]。それが、それぞれの文化圏の「建前」だと言える。

映画に見る呼びかけの事例は以下の通りである。

日本映画

| 上司→部下（287 例） | | 部下→上司（295 例） | | 同僚間（105 例） | |
|---|---|---|---|---|---|
| LN ＋君 | 124（43.21%） | 役職名 | 194（65.76%） | LN | 43（40.95%） |
| LN | 71（24.74%） | LN ＋さん | 48（16.27%） | LN ＋さん | 26（24.76%） |
| LN ＋さん | 32（11.15%） | 役職名(in full) | 24（8.14%） | お前[13] | 18（17.14%） |
| おい | 16（5.57%） | LN ＋役職名 | 20（6.78%） | LN ＋君 | 7（6.67%） |
| お前 | 7（2.44%） | その他（「室長さん」「先輩」「親父さん」「京助さん」等） | 9（3.05%） | 貴様 | 3（2.86%） |
| 君 | 6（2.09%） | | | 役職名 | 2（1.90%） |
| 貴様 | 6（2.09%） | | | 役職名 +LN | 2（1.90%） |
| 皆 | 6（2.09%） | | | その他（「おい」「お前さん」「新人」等） | 4（3.82%） |
| FN ＋ちゃん | 4（1.39%） | | | | |
| 役職名＋ LN | 3（1.05%） | | | | |
| 役職名 | 2（0.70%） | | | | |
| FN | 2（0.70%） | | | | |
| その他（「ちょっと」「みえさん」等） | 8（2.78%） | | | | |

アメリカ映画

| 上司→部下（141 例） | | 部下→上司（155 例） | | 同僚間（50 例） | |
|---|---|---|---|---|---|
| FN | 77（54.61%） | FN | 62（40.00%） | FN | 26（52.00%） |
| pal | 20（14.18%） | TLN[16] | 57（36.77%） | FFN | 13（26.00%） |
| buddy | 13（9.22%） | sir | 31（20.00%） | LN | 5（10.00%） |
| FFN | 6（4.26%） | その他（FFN, 'boys' 等） | 5（3.23%） | その他（TLN, 'my friend', 'man' 等） | 6（12.00%） |
| sport[14] | 6（4.26%） | | | | |
| boy | 4（2.84%） | | | | |
| Full name | 3（2.13%） | | | | |
| LN[15] | 3（2.13%） | | | | |
| その他（'kid', 'dear', 'girls' 等） | 9（6.37%） | | | | |

イギリス映画

| 上司→部下（125例） | | 部下→上司（64例） | | 同僚間（32例） | |
|---|---|---|---|---|---|
| FN | 80（64.00%） | FN | 48（75.00%） | FN | 23（71.88%） |
| LN | 9（7.20%） | TLN | 9（14.06%） | FFN | 8（25.00%） |
| FFN | 7（5.60%） | mate | 4（6.25%） | mate | 1（3.12%） |
| Full name | 7（5.60%） | その他（'sir'，(gentlemen 等） | 3（4.69%） | | |
| mate | 5（4.00%） | | | | |
| TLN | 3（2.40%） | | | | |
| girls | 3（2.40%） | | | | |
| その他（'gentlemen'，'buddy'，'sweetheart' 等） | 11（8.80%） | | | | |

（LN: Last Name, FN: First Name, FFN: Familiarized First Name, TLN: Title + Last Name）

日本企業においては、上司―同僚―部下の間で、発話の方向を問わず、LN が使用されているのが分かる。上司から部下への呼びかけは「君」づけ（43.21%）か呼び捨て（24.74%）で「さん」づけ（11.15%）が次に続く。部下が上司を呼ぶ時は、役職名（65.76%）が圧倒的に多く、「事業部長」「人事部長」等、役職名を担当部に付けて言う場合と名字に役職名を付加する場合（「島課長」等）を含めると、80.68% に上る[17]。同僚間では、LN の呼び捨てが最も多く（40.95%）、「LN ＋さん」（24.76%）、「お前」（17.14%）がこれに続く。上司から部下への「LN ＋さん」は、『陽はまた昇る』の加賀谷事業部長→大久保次長や『金融腐蝕列島再生』の佐藤常務企画部長→竹中推進部副部長の例のように、部下に何らかの引け目を感じているか丁寧な物言いをする人の場合で、日本社会の「建前」が要求しているものではない。部下から上司への「LN ＋さん」は、『ハゲタカ』の端末事業部員→芝野再生担当取締役本部長や『金融腐蝕列島呪縛』の北野副部長→久山顧問や『兜町』の横島営業本部取締役→野々山会長等に見られ、それぞれ、上司というより年齢的、心情的に近い先輩という感覚、個人的にも親しい間柄、或いは相手への強い反発を表している[18]。

アメリカ映画の上司から部下への呼びかけは、FN と FFN を合わせると 58.87% となる。それ以外は、'pal'、'buddy' 等の Familiarizers（親称）（30.50%）である。部下から上司へは FN（40.00%）が最も多く使用されるが、敬称の TLN と Honorifics を合わせると、56.77% に増える。*Nine to Five* の Bernly 部員→ Hart 部長、*Wall Street* の Fox 投資コン

サルタント→Gekkoオーナー、*Working Girl*の社員→Trask会長がその例である。そこでは服従すべき存在としての上役の権威が描き出されている。同僚間では殆どFNとFFNが使われている（78.00%）。この結果から導き出されることは、アメリカの「建前」である‘You and I are equals.’（Sakamoto & Naotsuka, 1998: 1）は、上司→部下の呼称では全うされているが、部下→上司の場合は、それほど顕著ではないということである。

イギリスのビジネス界においては、上司→部下は、FNとFFNで69.60%、部下→上司はFNが75.00%、同僚間はFNとFFNで96.88%と、本稿の考察では、それぞれの範疇で占めるFNとFFNの割合がアメリカのそれよりも多い[19]ことが分かった[20]。

## 4．文化背景と呼称

今回の分析では、映画のテーマの違いが呼称に与える影響を検証するものではなく、本数の不統一もあるが、程度の差こそあれ、3つの文化圏における企業活動の諸問題、人事・リストラ・乗っ取り・不正投資等を取り上げている点では一致しており、対象を同一企業内或いは経営組織内での共同業務者と限定したことで、全体的な傾向把握に有効であると考える。それにより、仲間意識を「建前」とするアメリカ社会が、上司→部下、部下→上司の両方向で共通したFNを使用するとは限らないのに対して、却って、伝統社会であるとされるイギリスのビジネス場面で相互のFN使用が確認されることになった。日本では呼称使用は、上下方向で全く非対称[21]となり、「建前」が反映されている結果となった。Brown & Gilmanの‘power’と‘solidarity’の理論を適用すると、アメリカは、静的な社会ではないけれどもビジネスでは、‘power’の要素が優勢であり、イギリスは静的な階級社会だが、ビジネスでは‘solidarity’の「建前」が通っており、日本は静的な社会であり‘power’の原理が通用しているということになる。

> Brown and Gilman（1960: 256-60）... view difference in power as leading to non-reciprocal address practices, with the less powerful interlocutor using V ‘upwards’ but receiving T in return. However, the ‘power semantic’ works only in a static society in which everybody has a clearly defined place. In modern societies, characterised by social mobility, power is replaced by ‘the solidarity semantic’（i.e. degree of social distance）. Thus, the social dimension is horizontal, based on degree of equality.（Clyne, Norrby & Warren, 2009: 28）

更に、Brown & Ford（1964）のパターンに関連させると、アメリカでは職業上の地位‘status’の違いにより呼称の非相互性が見られ、イギリスでは親密さを打ち出すための呼称の相互性が現れていると言える。

> The most common address forms are the first name（FN）and the title plus last name（TLN）. These function in three sorts of dyadic patterns: the Mutual TLN, the Mutual FN, and the nonreciprocal use of TLN and FN. The semantic distinction between the two mutual patterns is on the intimacy dimension with Mutual FN being the more intimate of the two patterns.（Brown & Ford, 1964: 243-244）

一方、日本文化は縦（上下）と横（ウチ・ソト、親疎）の関係（滝浦，2005: 252）を持つ集団社会であり、個人はその中の「場」[22]に応じた呼称を選択する。

> 場がなかったら、自分は、そして他者はどのようなことになるのか。場がなかったら、自分の位置と内容は、日本語の世界では、いつまでもきまらない。… 日本語の世界での自分という人は、相手という存在が作ってくれるひとつひとつの関係のなかでの、自分と相手とのあいだにある上下の位置関係を細かく計って確認し、そのような関係のなかでのみ話が交わされることをも確認した上で、その範囲内でのみ相手と話を交わしていく。（片岡，1997 in 月本，2008: 206）

文化人類学的に見て、人を呼ぶことは、間接的に相手に‘触れる’ことを意味するために基本的なタブーに抵触する側面を持つ（滝浦，2007: 34）という指摘があるが、垂直型社会構造の言語である日本語の場合はその傾向が強く[23]、目上の相手に対しては、相手に直接‘触れない’ように、相手の‘人’ではなく、方向や場所等で呼ぶ「遠隔化的呼称」（ibid.）を使う。ビジネス場面では、相手の役職という‘役割’[24]を用いて、上司と距離を置く間接的[25]な呼び方かけをするのが一般的である。逆に、目下や対等な相手を呼ぶ際には、相手の‘人’を直接的に名指すために代名詞や名前を使う「共感的呼称」（滝浦，2008: 78）が使用される。これは、相手の内面に踏み込んでいくような呼称であり、そうしても互いの人間関係は損なわれないという隔てのなさ（滝浦，2007: 34）への話し手の意識を表している。

## 5.「本音」の根拠

これまで考察してきたように、呼称には、対人的な距離を大きく取る「敬避的な要素（敬称）」と距離を小さくする「共感的な要素（親称）」（ibid.: 32）がある。そして、発話に関わる両者間で同じ種類の呼称が使われたら、対等な関係を示し、違う種類が用いられたら、両者間の相違を決定する何らかの要素が存在することになる[26]。その際、一つの呼称を選ぶ要因として挙げられているものは、相手の情報の有無、社会的・職業上の地位、年齢、性別[27]、国籍の違い、親疎の度合い等であり、それらが複合的に組み合わさった場合や話し手のパーソナリティーの影響（Dunkling, 1990: 22-30）もある。加えて、怒りや愛情等、話し手のその場の高揚した感情も呼称の選択に大きな決め手となる[28]。

### 5.1　日本映画の場合

上司は部下を「名字」、或いは「名字＋君」、部下は上司を「役職名」で呼ぶのが日本の慣例（「建前」）であるが、両方向ともに「名字＋さん」が使われている場面があることは前述の通りである。

上司から部下への呼びかけで、『陽はまた昇る』の加賀谷事業部長は、高卒であり、事業本部に転任してきたばかりであることから、大卒のエリート次長の大久保を「大久保さん」と呼んでいる。大久保の方が恐縮して、「あの、事業部長、大久保さんというのを少しやめてくれませんか。」と願い出る。その後、加賀谷は大久保を「大久保君」と呼んでいるが、ビデオ開発で弱腰になった大久保を叱りつける場面では、「大久保、やるんだよ、大久保。」と呼び捨てている。大久保の呼び方は、加賀谷がビデオ販売まで時間稼ぎをするために右肩上がりの計画書作成を依頼した時からまた、「大久保さん」へと戻っている。古参の社員も「服部さん」「杉沢さん」と「～さん」づけで呼ばれている。若い社員に対しては、最初は「新田さん」であったが、ほどなく、「新田君」に変わり、本社の部下だった社員は「江口君」と「～君」の呼びかけを使っている。つまりここでは、ボス風を吹かさない加賀谷の性格が大きな要因であるとともに、学歴、年齢、職場での経験年数が加賀谷をして部下を「～さん」づけで呼ばせる背景となっている。『戦士の資格』では、リストラ対象者のインタビューで、井上部長が面識のない年配の女子社員を「田端さん」と呼んでいるが、彼女の仕事ぶりを目の当たりにした後では「田端君」と呼称が変わる。「～さん」から「～君」、「～君」から呼び捨てに変化するにつれ、上司から部下への距離感が縮まり、連帯感が出てきている。

一方、部下が通常使用している「役職名」ではなく、上司を「名字＋さん」と呼ぶの

は、相手に対する尊敬や信頼感がなくなり、怒りと軽蔑の念さえ抱いているということを公言して憚らない場面で顕著に現れる。例えば、『兜町』の横島営業本部取締役専務は、野々山会長から「こりゃあ君の責任だよ。君が余計な提案をするから。」と派閥争いに負けたことを自分の責任にされた時、これまでの「会長」という呼び方ではなく、「～さん」「あなた」を使って、「野々山さん、今後、あなたの指示を仰ぐつもりはありませんよ。あなたはもう、御自分のエゴイズムを通すことしか考えていない。」と言い放っている。また、『集団左遷』で、篠田本部長が敵対する横山副社長に対して、公然たる態度で「横山さん、贈賄罪容疑で告訴できるんですよ。」と激怒している状況でも「～さん」は現れる。「役職名」より間接さと丁寧さのレベルが低い呼び名であり、感情が反発であれ、親近感であれ、話し手の立場に近い存在として位置づけられている。

### 5.2 アメリカ映画の場合

Wall Street の Gekko は、自分に取り入ろうとする Fox を親称（Endearment）の 'bud'、'buddy'、'pal'、'sport' と呼びかけるが、殆ど相手の個人名[29]を使わない。その中で、フルネームを使用している2場面は、"All right, Bud Fox. I want you to buy 20,000 shares of Bluestar." と "I would make you rich, Bud Fox." で、どちらも Fox の力量を高く評価し、自分の仲間として受け入れた箇所である。逆に LN のみを使っているのは、大損をさせられていつになく冷静さを失い、電話口で、"Fox, where the hell are you? Do you hear me, Fox?" と怒鳴りつける場面である。LN のみを用いる呼び方は、Bluestar のパイロット組合長が Gekko の企みを知って彼と決別する時に吐き捨てるように告げる "Nice to see you, Gekko." とともに、見下した言い方となっている。また、Fox が Gekko を初めて FN で呼ぶのは、アメリカの「建前」[30]とは違って、かなりの間力量を試され、ようやく投資顧問として正式に契約にこぎつけた時である。それまでは、Honorifics である 'sir' を使っている。

部下から上司への呼びかけの不適切さが問題になる事例は、*Working Girl* において、秘書の McGill が初めて上司である Parker 部長に会って打ち合わせをした時、FN を使った（"Yes, Catherine."）ことに対して、Parker が "And, call me Catherine." と確認するように言うシーンに現れている。対等でない関係において、TLN から FN へと親密さの流れを作るのはあくまでも目上（Braun, 1988: 16; Argyle, 1995: 141-142）である。部下が主導権を握ろうとすると上司は面目を失うことになる。

> ... in the progress towards intimacy of unequals, the superior is always the pacesetter initiating new moves in that direction. The superior is the pacesetter because the willingness of the person of lower status to enter into association can be taken for granted and there is little risk that a superior will be rebuffed whereas the risk would be great if the inferior were to initiate acts of association. ... Each new step towards friendship is, ... initiated by the person of higher status. (Brown & Ford, 1964: 244)

一緒に仕事をしてきている者同士でも、感情の行き違いがある場合にはFN使用が呼ばれた側にとっては腹立たしい時がある。*The Insider*で原稿をカットされたことに激怒しているニュースキャスターのWallaceをなだめようとして、法務担当重役のCaperelliがFNで、"Mike, Mike, Mike." と呼びかけたところ、"Mike? Mike? Try Mr. Wallace. We work in the same place. Doesn't mean we work in the same profession." と、却って怒りを激しくしてしまう。Caperelliは上役と言えるが、年配のWallaceよりもはるかに若く女性である。経営者側への反発で感情が高ぶっているWallaceには、年齢や性別や業務内容の違いを重視する「本音」が現われ、上司といえどもFNで呼ばれることを許容しない。

### 5.3　イギリス映画の場合

*Bridget Jones*の2シリーズにおいて、上司がJonesを呼ぶ時、FNのBridgetやフルネームやFFNのBridgの他に、LNのJonesを連帯感をこめて使用している場面がある。特に、一時期個人的にも親しい関係にあったCleverは状況により、様々な親称を使っている。彼が敬称（Ms. Jones）を用いるのは、1箇所で、*Bridget Jones's Diary*で彼女が辞表を出すシーンである。上司として契約条項を持ち出し辞めないように説得を試みている。Brown & Levinson（1978a）の理論で解明すると、仲間意識のpositive politenessが通用しなくなったので、距離を置き、相手の領域に踏み込まないnegative politenessのスタンスに切り替えて公的に辞職を引き留めようとしてみたと言える。

ポライトネスの範疇（Brown & Levinson, 1987: 245）でイギリスは日本とともに、伝統的に間接表現とニュアンスを用いる（Fukushima, 2000）negative politenessの文化であるとされている（Stewart, 2004: 117）。ビジネスではなく、階級社会を扱った映画[31]では、個人名を出さない間接的な呼称Honorifics（'lord'、'your excellency'、'senior' 等（Braun, 1988: 57））かTLNが召使から主人への呼びかけに用いられ、主人から召使には

FNかLNが使用される非対称の呼称構造が明確となる。

## 6．結語

今回のビジネス映画の呼称分析では、上司から部下への個人名、部下から上司への役職名使用という非対称の日本映画と両方向の個人名使用のイギリス映画は、大半がそれぞれの文化の「建前」を呈示していた。「本音」が出てくるのは、日本映画で、上司から部下への遠慮、ためらい、部下から上司への、主に、否定的な個人感情の発露を表す場面であった。前者は距離を置く丁寧さを示している点で部下との連帯感が希薄であるし、後者は、尊敬を拒否している点で社会的に言えば無礼であり、関係の修復を完全に放棄している。

一方、アメリカ映画では対等の仲間であるという「建前」よりもむしろ、非対称の力の上下関係の図式が明らかになった。「本音」として、上司は呼び方の主導権を主張し、部下は上司とは距離を持って接する。ただ、上司に対して感情的になっている場合は、年齢の違い等が優先され、目上からの馴れ馴れしさを拒絶する気持ちが表面化する。

数多くある呼称の中から一つを選ぶための一般的な基準は、与えられてはいても、それらは固定したものではなく（Clyne, Norrby & Warren, 2009: 79）、話し手は、「建前」に基づこうと「本音」に頼ろうと、目の前にある特定の状況下でどの要素に主眼を置くのが最も適切かを絶えず判断していくことになる。更に、例えば、英語のFN使用の場合、連帯感、親近感を表すと同時に力、支配も表現される（Argyle, 1995: 142）ことになるがゆえに、使われ方が二重性を帯び、対称的な使用か、非対称的な使用かによって話し手の意図を知ることになるのである。日本語では、丁寧さは間接的に表現されるのが常であるから、英語とは異なり、互いの距離の近さと一致するものではない。

また、呼称に関しては、英米文化と日本文化で、個人間の関係の流動性の度合いの差が明らかになる。それは、同じ人物が同じ相手との関係で状況によって異なる呼び方を使用するか否かの違いに見られる。TLNで始まり、FNに移行したり、ある場面では、TLNが再び用いられたりするのがアメリカとイギリスでは日常的な慣例であるが、日本では、上司―同僚―部下の地位構造は堅固たるもの（Nakane, 1973: 30-34）であるので、上司は、会社以外のどのような場面でも上司であり、それゆえに、業務外の日常生活の場でも、会社内と同様の「役職名」で呼ばれ、部下は個人名で呼ばれる形態が存続するのである。

今後も、引き続きビジネス場面の呼称の検証対象を広げ、量的にも十分な事例を集めることで、より詳細に呼称と文化の関係を分析していくことが課題であると認識している。

注

1) 井出（2006: 186）は、Brown & Levinson（1987）の枠組みが話し手を個人として捉え、自分の意志でポライトネスのストラテジーに応じた適切な表現を作り出すという点で、話し手が「場」の中にいる文化圏では適用出来ないとして「わきまえ」の枠組みを提示している。そこでのポライトネスに応じた言語使用とは、「場」の諸要素を分析的にではなく、総合的に直感で読み取り、その場に適切な言語形式を慣性的、自発的にマッチさせることだとしている。英語と日本語のポライトな言語使用を井出（2006: 94-95）は、「アメリカ人はポライトであることとフレンドリーであることが一緒に考えられていて、それが良い行動の表現方法となっている。... しかし、日本語の場合、丁寧さを表わす言語装置である敬語と、フレンドリーを表わす終助詞は全く別のものである。」と述べている。Brown & Levinsonの理論の普遍性、ストラテジーの固定化を疑問視する傾向は、Matsumoto(1989)、Watts（2003）等にも見られ、個別の文化背景の重要性、対話者間でその場で作り出される話の流れが論じられている。濱口（1998）は日本語使用における義務的なこととして、部分（話し手の言いたい命題内容）と全体（話の場）の両方を同時に意識してそれを言葉遣いで示すことであると論じている。

2) 例として、Brown & Ford（1961）が挙げられている。この分野では、更に、Sifianou（1992）が英語のポライトネス表現の豊富さ、間接的な表現の使用が呼称代名詞の区別のなさを補うと提唱し、Leech（1999）が英語のFN/TLN使用とヨーロッパ言語のT/V区分を比較検討している。Leech（1999）のfamiliarizersやFormentelli（2007）の‘terms of friendship’は、‘T-like modes of address’として挙げられている。(Clyne, Norrby & Warren, 2009: 18)

3) Braun（1988: 11）の提示する‘free forms of address: “outside” the sentence construction’である。因みに、これに対するものとして挙がられているのは、‘bound forms of address: integrated parts of sentences’である。

4) Dunkling（1990: 2）は、‘term of address’と‘vocative’を同義語と捉えており、Levinson（1983）は、呼称を‘vocatives’として、それを‘summonses’と‘addresses’に分け、前者を文とは独立した呼びかけ、後者を挿入語と説明している。

5) Braun（1988: 10）は、任命や相続によるタイトル（doctor, mayor, count, duke等）、職業の名称（waiter, chauffeur等）を、McConnell-Ginet（2006:78）は、名字のみ（Robinson等）、ニックネーム（Teddy Bear等）、ののしり（bastard等）を加えている。Taavitsainen & Jucker（2003: 2）は、“Early Modern English had a rich system of nominal forms of address with ... a wide range of occupational terms and titles.... Present-day English, on the other hand, has a much reduced system. Occupational terms are rarely used,....”と述べている。

6) Brown & Levinson (1987: 111-183) は、Endearment や Familiarized first name を positive politeness に、'sir' (Honorifics) を FTA (Face-Threatening Act) 時の使用に結び付けている。また、TLN は社会的に距離のある人の間で相互に使われるか、階級の下から上に一方方向で使用され、FN/FFN は近しい関係の人々で相互に用いられるか階級の上から下に一方方向で使われるとし、どの程度の呼称を選ぶか、個別の選択の要素が何かはそれらを使用する特定の集団による (McConnell-Ginet, 2006: 78) という指摘もある。

7) ... *sir* conventionally implies that the addressee is male and socially higher in rank than the speaker .... (Levinson, 1983: 53) *sir* と呼ばれることについての反応について、次のような記載もある。A common reaction by men, when addressed as 'sir', is one of irritation. Seeing themselves, perhaps, as young and rather interesting individuals, they do not like to be reminded by others that, they appear to be elderly and respectable. (Dunkling, 1990: 31)

8) Lebra (1976: 257) contrasts "the Western model based on the complex of individuality, autonomy, equality, rationality, aggression, and self-assertion" with "the traditional [Japanese] complex of collectivism, interdependence, superordination-subordination, empathy, sentimentality, introspection and self-denial." (Wierzbicka, 2003: 72)

Japanese view society in terms of groups and group members (us-them), and the line dividing 'us' from 'them' is quite distinct, members of the 'them' category being either ignored or treated with distinct formality while members of the 'us' group are accepted with a relationship of warm friendship. Westerners, on the other hand, view society in terms of individuals (me-you-him), and the individual is supposed to be seen as important in his own right without reference to background status. (Naotsuka, R., Sakamoto, N. *et al.*, 1994: 168-169)

Regardless of the social differences, the Japanese believe that they possess a great deal of homogeneity. (Donahue, 1998: 41)

9) In collectivistic cultures like Japan, individuals do not expose their true feelings until they know another person well. In individualistic cultures, individuals are expected to express themselves to others even if they do not know them well. (Gudykunst & Nishida, 1994: 66)

10) ... address usage encodes the relationship and attitudes of interlocutors perhaps to a greater extent than other aspects of language and is thus more open to cultural variation. (Joseph, 1989 in Clyne, Norrby & Warren, 2009: 1)

11) Wierzbicka (2003: 106) は FN が TLN よりも 'intimate' であるとは言えないと指摘している。

12) ... the pragmatics of English might have relatively little to say about social status ...., while in contrast the pragmatics of Japanese would be greatly concerned with the grammaticalization of the relative social ranks of participants and referants. (Levinson, 1983: 10)

13)「[名字] さん・役職名」「役職名」以外の呼称には、どちらかというと年下の相手に対して常体とともに用いられる傾向がある。また、「おまえ（男性専用語とみてよい）」も含め、発話者の年代による使用の偏りについては特に顕著な傾向は見られない。(小林, 2004: 117)

14) ... applied to young men in general, regardless of their sporting interests, at the beginning of the twentieth century, especially in the USA. It then became possible to use the term to address a man, either one well-known to the speaker or a stranger. (Dunkling, 1990: 218)

15) There is an old-fashioned public school and Oxford male style of address by last names only, but this is falling into disuse. (Argyle, 1995: 142)

16) Forms of the Mr/Mrs-types are often derived from lexemes with the meaning of 'senior', 'master', 'superior'; they usually start their career as forms of address for social superiors, hence with lexical and social components in correspondence .... Although once introduced to express superiority with the help of suitable literal meanings, their use was more and more extended, while other variants (titles) took over the function of signaling high status, until finally the bond between lexical origin and social meaning was cut. Thus, people addressed as *Mr/Mrs* ... need not be 'masters' or social superiors anymore. (Braun, 1988: 260)

17)「職場では…「[名字] さん」がもっともよく使われている。ついで…「[名字] 課長」などの「[名字] 役職名」、さらに名字なしで役職を呼ぶ例が多く見られる。」(小林, 2004: 104) この「[名字] さん」の指摘は本稿の分析では当たってはいない。

18) 部下から上司に対しての「名字＋さん」は「相手の年齢や性別にかかわらず...職場ではもっとも一般的な呼称」(小林, 2004: 117) とする説と「課員から課長に対して「内田さん」は絶対に言えない。」(中崎, 2002: 12) という説とがある。本稿の検証では後者を支持する結果が出ている。

19) Recent development in British English address practices include an increasingly widespread use of first names in work contexts and service encounters, possibly influenced by patterns in American English, and the spread of terms of endearment such as *mate*. (Clyne, Norrby & Warren, 2009: 4)

There is little evidence for class differences in how people address each other in Britain.

(Argyle, 1995: 142)

…the use of FN is now becoming generalized, to the extent that honorific + LN "is increasingly relegated to marking a more distinct and respectful relationship towards an acquaintance." (Leech, 1999:112) … "the use of honorific + LN remain the norm in certain specific speech situations or domains, such as job interviews, … and work situations where a degree of formality is required." (Bargiela *et al.*, 2002: 5) (both in Clyne, Norrby & Warren, 2009: 18)

20) Leech (1999: 113-114) は、日常生活における英米の呼称を調査し (Proportion use of vocative types in a sample of American and British conversation by the Longman Corpus of Spoken and Written English: AmE: 47,934 words; BrE: 51,722 words)、Familiarizers: AmE 21.93%, BrE 4.44%; Given names (familiarized) : AmE 39.04%, BrE 16.11%; Given names: AmE 23.25%, BrE 48.89%; Title + surname: AmE 3.51%, BrE 0.00% という結果を得ている。そこから、アメリカではイギリスよりも親称を好む傾向がずっと強く、現在の英語では FN の使用が一般的になってきているので TLN は特に距離を置く尊敬の対象に用いられ、Honorific address は殆ど使われないと分析している。しかし、これは、Leech 自身が指摘しているように、あくまでも家庭における私的な言語使用のサンプルの分析に留まったものである。

21) 現在の日本人の自称詞と他称詞に関して … 規則性を基本的に支えているものは、目上 (上位者) という対立概念である。… 話し手は、分割線より上の者を名前だけで直接呼ぶことはできない。これに対し、分割線の下に位する者は、名前だけで呼ぶことができる。… 普通の状況下では自分の … 上役を「あなた」のような人称代名詞で呼ぶことはできない。… 反対に課長が部下に対し「きみの…」と尋ねることは許される。… 社会的に目上の人を、… 課長といった地位名称で呼ぶことは普通である。名前 (姓) の使用に関しても、上下の分割線はよく守られている。… 上役を姓だけで呼ぶのは、かなり珍しいケースで、名前を使うときは … 山田課長のように地位名称を付加しなければならない。… 目上に対して話し手が自分のことを名前 (姓) で … は言えるが、その逆はない。(鈴木, 2007: 149-156))

22) 中根 (2005, 30-49) は、日本人の集団意識が職業、年齢、性別等の「資格」ではなく、職場や学校という「場」に置かれているということで「ウチの者」と「ヨソ者」との区別を明確にするのが集団存続のためには不可欠であると説いている。

23) It has been recognized that language is an integral part of culture. This is especially true of communicative style. The particular communicative style of a culture arises from shared beliefs about people, what they are like, and how they should relate to one another, and is an important means of perpetuating those beliefs. (Scarcella, Andersen & Krashen, 1990: 33)

24) 鈴木（2007: 181-187）によると、「役割とは、ある特定の資格や性質をそなえた人が、社会的なコンテクストの中で、一般的に示すと考えられる特定の行動様式を指す概念である」とされる。そして、「日本語と英語の構造的な相違は、英語の一人称、二人称の代名詞が話し手や相手がそれぞれ持っている地位、年齢、性別等とは無関係に非常に抽象的な役割だけを表明する機能のみを有しているのに対して、日本語の自称詞と他称詞は人間関係の上下の分極に基づいた具体的な役割の確認とつながっている」と論じられている。

25) Indirect expression is ... a distinctive feature of the Japanese way of communication. (Tsujimura, 1989: 122)

26) In the tradition of Brown/Gilman (1960) and Brown/Ford (1961), it has become customary to view reciprocity of address in a dyad (i.e., exchange of the same variant) as a signal of equality, real or pretended. Nonreciprocity has been interpreted as an expression of difference in age, status, or whatever. (Braun, 1988: 293)

27) ... intimacy and distance are determining the selection in symmetrical relationships. Nonreciprocity of FN and TLN is caused by differences in age or professional status.(Braun, 1988: 16)

... asymmetrical exchanges were found where there was age difference or occupational rank difference. (Ervin-Tripp, 1989: 218)

Nominal address forms in English are a particularly heterogeneous group, with a range of terms whose use varies according to factors such as domain, relationship between speaker and addressee, and various speaker characteristics such as age and sex. (Clyne, Norrby & Warren, 2009: 18)

28) The decision as to what mode(s) of address to employ can be determined by rational choice or spontaneous emotional reactions. (Clyne, Norrby & Warren, 2009: 79)

Wales (1983: 116; 1990, 152) は、*thou* と *you* の分析の中で、それらを選ぶ要因として、"... there is an important ... factor, namely its use for expressing heightened emotionality, whether anger or affection." と述べている。

表現対象と表現形式の関係は決して一対一ではなく、話し手がいだく心理的距離によって遠くもなれば、近くもなる .... (滝浦 , 2007: 32)

29) 主人公の名前が Bud Fox なので、実際は、個人名の Bud、FFN の Buddy の使用が幾つか使われている可能性はある。

30) "We are close friends." (Sakamoto & Naotsuka, 1998: 16)

The current fashion in the English-speaking countries appears to be an egalitarian simplification centred on first name usage. (Dunkling, 1990: 30-31)

31) *Brtideshead Revisited* (1981), *Gosford Park* (2001), *Maurice* (1987), *Remains of the Day*

(1993), *Upstairs Downstairs* (1971) 等

Featured Films

日本映画：

『ハゲタカ』(2007) 演出：井上剛、堀切園健太郎、大友啓史　原作：真山仁　脚本：林宏司　NHK

『ヘッドハンター』(1990)　演出：福田新一　原作：江波戸哲夫『ヘッドハンター』筑摩書房　脚本：永原秀一　TBS

『陽はまた昇る』(2002)　監督：佐々部清　原作：佐藤正明『映像メディアの世紀ビデオ・男たちの産業史』日経BP社　脚本：西岡琢也・佐々部清　東映

『兜町』(1989) 演出：近藤邦勝　原作：江波戸哲夫『疑惑株』徳間書店　脚本：横田与志　TBS

『課長　島耕作』(1992)　監督：根岸吉太郎　原作：弘兼憲史『課長　島耕作』講談社週刊モーニング　脚本：野沢尚　東宝

『課長　島耕作』(2008)　演出：杉本達　原作：弘兼憲史　『課長　島耕作』モーニングKC講談社　脚本：君塚良一・北川大樹　日本テレビ

『課長　島耕作2　香港の誘惑』(2008)　演出：大塚恭司　原作：弘兼憲史　『課長　島耕作』モーニングKC講談社　脚本：君塚良一・北川大樹　日本テレビ

『金融腐食列島　呪縛』(1999)　監督：原田眞人　原作：高杉良『呪縛　金融腐食列島』角川書店　脚本：高杉良・鈴木智・木下麦太　東映

『金融腐食列島　再生』(2002)　監督：佐藤純彌　原作：高杉良『続・金融腐食列島　再生』角川書店　脚本：鈴木智・佐藤純彌　BS-i toskadoma!n

『燃ゆるとき』(2006) 監督：細野辰興　原作：高杉良『ザ エクセレントカンパニー／新燃ゆるとき』『燃ゆるとき』角川文庫　脚本：鈴木智　東映

『レガッタ―国際金融戦争』(1999)　演出：(第一回・最終回) 大友啓史　(第二回) 高橋練　脚本：仲倉重郎・江口美喜男　NHK

『左遷』(1990)　演出：高橋一郎　原作：江波戸哲夫『総合商社』講談社　脚本：横田与志　TBS

『戦士の資格』(2008) 演出：小原一隆　脚本：高橋幹子　フジテレビ

『社葬』(1989)　監督：舛田利雄　脚本：松田寛夫　東映

『集団左遷』(1994)　監督：梶間俊一　原作：江波戸哲夫『集団左遷』世界文化社　脚本：野沢尚　東映

『出世と左遷』(1996)　監督：坂崎彰　原作：高杉良『人事権！』講談社　脚本：岩間茂樹　TBS

アメリカ映画：

*Insider, The.* (1999). Directed by Michael Mann. Written by Eric Roth and Michael Mann. Buena Vista International/Touchstone Pictures.

*Nine to Five.* (1980): Directed by Colin Higgins. Screenplay by Colin Higgins and Patricia Resnick. Twentieth Century-Fox Film Corporation.

*Secret of My Success, The.* (1987). Directed by Aj Carothers. Screenplay by Jim Cash and Jack Epps, Jr. and Aj. Carothers. Universals.

*Two Weeks Notice.* (2002): Directed by Marc Lawrence. Written by Marc Lawrence. An AOL Time Warner Company.

*Wall Street.* (1987). Directed by Oliver Stone. Written by Stanley Weiser and Oliver Stone. Twentieth Century Fox Film Corporation.

*Working Girl.* (1988). Directed by Mike Nichols. Written by Kevin Wade. Twentieth Century Fox Film Corporation.

イギリス映画：

*Bridget Jones: The Edge of Reason.* (2005). Directed by Beeban Kidron. Screenplay by Andrew Davies, Helen Fielding, Richard Curtis and Adam Brooks. Universal Studios, Studios CANAL, Miramax Film and Working Title Films.

*Bridget Jones' s Diary.* (2001). Directed by Sharon Maguire. Screenplay by Helen Fielding, Andrew Davies and Richard Curtis (from the novel by Helen Fielding). Universal Studios.

*Janice Beard: 45 WPM.* (1999). Directed by Clare Kilner. Screenplay by Clare Kilner and Ben Hopkins. Guardian Unlimited.

*The Office.* (2002). Directed & Written by Ricky Gervais and Stephen Merchant. BBC Worldwide Ltd.

*Rogue Trader.* (1999). Dircted by James Dearden. Script by James Dearden (from the autobiography by Nick Leeson). Britmovie, Co.

## 参考文献

Argyle, M. (1994/1995). *The Psychology of Social Class.* London: Routledge.

Bargiela, F. *et al.* (2002). Ethnocentrism, politeness and naming strategies. *Working Papers on the Web. 3: Linguistic Politeness and Context.* www.shu.ac.uk/wpw/politeness/bargiela.htm.

Braun, F. (1988). *Terms of Address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Brown, R. & Ford, M. (1961). Address in American English. *Journal of Abnormal and Social*

*Psychology* 62: 375-385.

Brown, R & Ford, M. (1964). Address in American English. In D. Hymes (ed.) *Language in Culture and Society: A reader in linguistics and anthropology* (pp. 234-244). New York: Harper & Row.

Brown, R. & Gilman, A. (1960). The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok (ed.) *Style in Language.* (pp. 253-276). London: Wiley & Sons.

Brown, P. & Levisnon, S. C. (1978a). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. Goody (ed.) *Questions and Politeness* (pp. 56-310). Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, P. & Levinson, S. C. (1978b/1987). *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Clyne, M., Norrby, C. & Warren, J. (2009). *Language and Human Relations: Styles of address in contemporary language.* NY: Cambridge University Press.

Dale, P. N. (1990/1995). *The Myth of Japanese Uniqueness.* London: Routledge.

Dickey, E. (1997). Forms of address and terms of reference. *J. Linguistics* 33: 255-274.

Donahue, R. T. (1998). *Japanese Culture and Communication: Critical cultural analysis.* Maryland: University Press of America

Dunkling, C. (1990). *A Dictionary of Epithets and Terms of Address.* London: Routledge.

Ervin-Tripp, S. (1972/1989). On sociolinguistic rules: Alternation and co-occurrence. In J. J. Gumperz & D. Hymes *Directions in Sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 213-250) . Oxford: Basil Blackwell.

Formentelli, M. (2007). The vocative mate in contemporary English: A corpus based study. In A. Sansò (ed.) *Language Resources and Linguistic Theory* (pp. 180-199). Milan: Franco Angeli.

Fukushima, S. (2000). *Requests & Culture.* Bern: Peter Lang.

Gudykunst, W. B. & Nishida, T. (1994). *Bridging Japanese/North American Differences.* California: Sage Publications.

濱口恵俊（編）（1998）.『世界の中の日本型システム』東京：新曜社

Ide, S. (1989). Formal forms and discernment. *Multilingua* 8: 223-248.

Ide, S. (1992). On the notion of *wakimae*: Toward an integrated framework of linguistic politeness.『ことばのモザイク』(pp. 298-305). MLS.

井出祥子（2006）.『わきまえの語用論』東京：大修館書店

Joseph, J. (1989). Review of terms of address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures by F. Braun. *Language* 65 (4) : 852-857.

片岡義男（1997）.『日本語の外へ』東京：筑摩書房

北山環（2007）.「日本文化：その形成と表出－西洋文化に対峙するものとして－」『語学教育部ジャーナル』第3号：59-86.

小林美恵子（2002/2004）.「職場で使われる「呼称」」現代日本語研究会（編）『男性のことば 職場編』（pp. 99-119）東京：ひつじ書房

Lebra, T. S. (1976). *Japanese Patterns of Behavior.* Honolulu: University Press of Hawaii.

Leech, G. (1999). The distribution and function of vocative in American and British English conversation. In H. Hasselgård & S. Oksefjell (eds.) *Out of Corpora: Studies in honour of Stig Johansson.* (pp. 107-118). Amsterdam: Rodopi.

Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Matsumoto, Y. (1989). Politeness and conversational universal observations from Japanese. *Multilingua* 8: 200-221.

McConnell-Ginet, S. (2003/2006). "What's in a name?": Social labeling and gender practices. In J. Holmes & M. Meyerhoff (eds.) *The Handbook of Language and Gender* (pp. 69-97). Malden, MA: Blackwell Publishing.

Miyanaga, K. (1991). *The Creative Edge: Individualism in Japan.* New Brunswick, NJ: Transaction Books.

中崎温子（2002).「「もらう」系コミュニケーションにおける「話し手主観性」と人称詞ハイラーキー」『言語と文化』No. 15: 1-20

中根千枝（1967/2005[121]).『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』東京：講談社

Nakane, C. (1970/1973). *Japanese Society.* Tokyo: Charles G. Tuttle.

Naotsuka, R., Sakamoto, N. *et al.* (1981/1994[5]). *Mutual Understanding of Different Cultures.* Tokyo: Taishukan.

Okabe, K. (1987). Indirect speech acts of the Japanese. In D. L. Kincaid (ed.) *Communication Theory: Eastern and Western perspectives* (pp. 127-136). San Diego, CA: Academic Press.

Sakamoto, N. & Naotsuka, R. (1982/1998). *Polite Fictions: Why Japanese and Americans seem rude to each other.* Tokyo: Kinseido.

Scarcella, R. C., Andersen, E. S. & Krashen, S. D. (1990). *Developing Communicative Competence in a Second Language.* Boston, MA: Heinle & Heinle Publishers.

Sifianou, M. (1992). *Politeness Phenomena in England and Greece: A cross-cultural perspective.* Oxford: Oxford University Press.

Stewart, M. (2004). Politeness in Britain: 'It's only a suggestion...'. In L. Hickey & M. Stewart (eds.) *Politeness in Europe* (pp. 116-129). Clevedon: Multilingual Matters.

鈴木孝夫（1973/2007[65]).『ことばと文化』東京：岩浪書店

滝浦真人（2005).『日本の敬語論：ポライトネス理論からの再検討』東京：大修館書店

滝浦真人（2007）.「呼称のポライトネス―“人を呼ぶこと”の語用論」『月刊日本語』Vol. 36 No. 12: 32-39.

滝浦真人（2008）.『ポライトネス入門』東京：研究社

Taavitsainen, I. & Jucker, A. H. (eds.). (2003). *Diachronic Perspectives on Address Term Systems*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Tsujimura, A. (1972/1989). Some characteristics of the Japanese way of communication. In J. J. Gumperz & D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 115-126). Oxford: Basil Blackwell.

月本洋（2008）.『日本人の脳に主語はいらない』東京：講談社

Wales, K. M. (1983). *Thou* and *You* in early modern English: Brown and Gilman reappraised. *Studia Lingusitica*, 37: 107-125. In P. Mühlhäusler & R. Harré *Pronouns & People: The linguistic contraction of social and personal identity*. (1990). Oxford: Basil Blackwell.

Watts, R. J. (2003). *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wierzbicka, A. (2003). *Cross-Cultural Pragmatics: The semantics of human interaction*. Berlin: Mouton de Gruyter.